

# 主題情報に基づく文献探索支援の研究 —検索結果の可視化と主題ファセットを用いた手法—

長岡 夏希

図書館の蔵書検索システムの用途は、既知文献探索と主題探索の2つに大別される。ディスプレイサービスにおいて、利用者は、シンプルなキーワードでざっくりと検索してから、膨大な検索結果を絞り込む操作を行なっている。国立国会図書館サーチ (NDL サーチ) のアクセスログ分析においては、簡易検索で検索したあと、ファセット機能の利用が「絞り込み」全体の70%を占めているという。「絞り込み」によるファセット機能の利用は多いが、図書館員によって付与された「分類記号」や「件名」のような主題情報を観点としたファセット機能による絞り込みの利用は少ないという報告がある。

そこで、本研究では、主題情報を用いた文献探索支援を目的として、主題グループごとに分割した検索結果インタフェースと、下位主題を詳細化する検索結果インタフェースおよびそのファセット機能の2つからなる手法を提案する。

提案システムでは、主題情報に基づいて、2段階画面構成で検索結果を表示した。第1段階画面では、最上位レベルの主題でグループごとに分け、グループ化した主題ごとに検索結果を表示する。続いて第2段階画面では、利用者が第1段階画面で示されたグループから対象の主題を選択すると、その主題における文献探索機能を備えている。主に、主題情報を基にしたファセット機能を用いて詳細な絞り込みを可能とした。主題情報は、日本十進分類法 (NDC) に加え、日本図書コードのCコードを少し変更したNCコードを利用した。

システムの評価実験は、筑波大学の学生の男女20名を対象に実施した。実験参加者を4つのグループに分けたうえで、4つの文献探索課題を設定した。それぞれの課題では、NDLサーチまたは提案システムを用いた文献探索を行い、課題終了後にシステムの満足度に関するアンケートを行なった。

評価実験結果は、主題ごとに分割した検索結果インタフェース (第1段階画面) が役に立ったかという質問に対して、「非常にそう思う」(40.0%)、「少しそう思う」(42.5%)という回答が多く、有用性は高いと考えられる。一方で、事後アンケートの自由記述に「文献探索課題が複数の主題に関連があるとき、第1段階画面のグループ分けは、かえって文献を選ぶのが困難であった」という声もあった。下位主題を詳細化する検索結果インタフェースおよびそのファセット機能 (第2段階画面) においては、ファセット機能を利用したのが全体の70.6%であった。ファセット機能が役に立ったかに対しては、「非常にそう思う」が全体の37.0%、「少しそう思う」が全体の44.4%が回答しており、こちらも有用性があると考えられる。

(指導教員 高久 雅生)